

書評

2015年4月

笹川純平（一橋大学生）

恥ずかしいことだが、戦争の記憶をめぐる、いわゆる歴史認識問題に関心をもちつつも、韓国・ベトナム（に加え一般にアジアの地域）それぞれで共有されている歴史をこれまであまり知ろうとしなかった。結局、アジアに対して無関心だったとも言えるし、別の言い方をすれば、ヨーロッパのみを参照系として優位においていたとも言えるかもしれない。さらに言えば、戦争そのものを知ることへの忌避感、それはつまり小学生の頃に見た生々しい映像や写真によって単に戦争それ自体だけでなく、それを「知る」ことを拒絶する様な感覚をもってしまっている影響もあるのかもしれない。しかし、本書を読んで、アジア地域の歴史に向き合う契機を手に入れることができた。

本書のなかの、「和解は、国家と国家の関係を通じてのみ、達成されるものではないのである。」(p.114)、「赦し」・「和解」は、事実を覆い隠したり、誤魔化したりすること、また国家間の物質的援助の垂れ流しによってだけでは、決して成し遂げられないと考える。」

(p.228) という主張には、大きく励まされた。現在の社会の状況の中でも、こうした視座をもち続けていくことは重要であろう。

また、「公的な記憶」が必ずしも正当性を有しているのではなく、むしろそこに潜む権力が一般の人々の記憶を抑圧しているというこの事実が、記憶を残す機会がない人々の声を直接聞くことではじめて明らかにされており、著者をはじめ、ク・スジョンや、ナワウリなどの NGO の聞き取り調査には圧倒される。オーラルヒストリーがもつ大きな意義が示されていると言える。

本書を読んで、思い起こされたこととして歴史認識をめぐる中野聡の提起がある。それは日本軍・アメリカ軍による「マニラ戦」の記憶について、日本とフィリピン間の戦後における認識の歴史過程を述べたものであるが、中野の論を簡単にまとめると、以下の通りである。

アジア・太平洋戦争の終結後しばらくの間、対日感情が悪化していたフィリピンだったが、1960年代半ばからこうした状況に変化が見られるようになる。戦没者慰霊のためフィリピンを訪れはじめた日本人が「お詫び」の論理を「携行」する傾向があり、フィリピン側がこれを「悔悟と謝罪」と捉え、厚意を示すという「お詫びと厚意」の互惠関係が促進され、フィリピン側は日本から大きな謝意を得ることができた。こうした「お詫びと厚意」の互惠関係が、民間交流を越え、日比政府関係の基本的な構成要素に組み込まれ、フィリピン政府が過去の日本の戦争責任を問わない「沈黙は金なり」の政策を展開することになり、そこに「友好的な発話」としての意味を付与した（「和解と忘却—戦争の記憶と日本・

フィリピン関係」足羽與志子・濱谷正晴・吉田裕編『平和と和解の思想をたずねて』大月書店、2010年)。

しかしこの結果は、日本がフィリピンにとって ODA 供与の最大の援助国となった一方、「マニラ戦」の記憶は和解の果てに忘却されることになったと中野は結論付けている。こうして、「私は、結局、対話こそが記憶保存の一番よい方法だと考える。」と主張する中野の指摘は本書とも重なる所が多い。

ベトナム政府の「過去にフタをして未来へ向かおう」という方針の下で、経済発展優先のために個々人の記憶が抑圧されている状況の中、社会に投げかけられた「残余の記憶」の問題は、日本にとっても決して無関係ではないはずである。「国益」の名の下に正当化される国家の意思決定自体が問われているのだとも、それにより差別・排除された存在に対する想像力を可能にする思考の構造が、今日この時代、強く求められているのだとも、様々な場面で感じる。歴史認識に限らず、原発や基地問題・路上の「憎悪」など、国家を絶対視した主体においては、他者の視点を決定的に欠いてしまう。したがって、歴史認識の問題をより大きな枠組みの中で捉えられるようにしていく必要がある。

そのためには、戦争責任論の一層の深化と同時に国家を脱構築していくこと自体もまた重要になってくると思う。たとえば、樋口陽一の言う、国家の人為性を強調する「デモス」としての国家像は、本書で紹介されている高橋哲哉の「応答可能性」とも親和性をもって感じるように感じる。また、西川長夫の「国民国家」論も改めて掘り下げていく価値があるはずだ。

ところで、戦争責任論については、高橋の「応答可能性」やテッサ＝モーリス・スズキの「^{インプリケーション}連累」など重要な理論が生み出されている一方、吉田裕によれば、戦争責任論は歴史学の中で広がりをおもに見せていないというのが実感らしい。その吉田が最近、西川の国民国家論を（戦争責任論の点で）批判している（「近現代史への招待」大津透・桜井英治・藤井謙治・吉田裕・李成市編『岩波講座日本歴史第15巻—近現代1』岩波書店、2014年、『図書』792号、2015年2月）。

このことは、未だに歴史認識問題とナショナリズムや民族・国民という価値観がどのように関係づけられているのか、活発に議論される余地が大いにあることを示しているのかもしれない。ベネディクト・アンダーソンに限らず、「ナショナリズムそのものが悪なのではありません。それは、「いわば社会の接着剤であり、人々に『自分は日本人だ』と感じさせるものです」と言い、「ナショナリズムは、人種偏見や性差別を乗り越えるのです」と主張する。そして「一方で、排外的な人種主義、民族主義は、過去にとらわれる思考です」（『朝日新聞』、2012年11月13日付朝刊）と截然とナショナリズムと排外主義を分けて考える論者は多いが、果たしてこのようなナショナリズムと「応答可能性」は両立することなどできるのかなど、まだまだ多くの課題があるように思う。

他方、赦しと和解のみならず、戦争記憶の問題を論ずることの意義は、次のような鹿野

政直の指摘にとっても極めて重要になってくる。

「にとって」の視点は、個の立場への凝縮をもたらしその意味で視野を狭めるようにみえながら、そこで回復されてきた主体性ゆえに、想像力の領域を拡大する。みずから「にとって」の視点にこだわりつづけることによって、他者「にとって」の痛みともいうべきものへの感覚（それは、放置しておけば無限に鈍化するものだが）が、多少とも研ぎすまされてくる。その結果、他者を他者としつつ、その他者の立場が、視野のなかに入ってくるようになった。」（「鳥島は入っているか」『鹿野政直思想史論集第7巻—歴史意識と歴史学』岩波書店、2008年）

本書では、この点にかかわって著者の視野の拡がりを強く感じた。そしてそのような視点で書かれた歴史は、紛れもなく「国家の」歴史ではなく、「人（間）の」歴史であろう。また社会を批判的に捉えていくうえでも欠くことのできない思考の様式をもたらしてくれるものである。